「二風谷のフチ菅野れい子とカッケマッたち」補遺

Additional text for "A Nibutani huci, Kayano Reiko and katkemat"

笹村律子(SASAMURA Ritsuko)

民族共生象徵空間運営本部文化企画部体験教育課専門員(Specialist for Cultural Programs, Educational Program Division, Culture Promotion Department, UPOPOY)

キーワード:聞き取り調査、個人史、女性史、萱野れい子、二風谷

Key Words: Interviews, Personal History, History of Women, Reiko Kayano, Nibutani

本稿は、2019年にアイヌ民族文化財団の助成を得て実施した調査「二風谷のフチ萱野れい子とカッケマッたち」について、調査を実施した背景や手法を明らかにし、報告書では記載できなかった内容を補うものである。カッケマッとはアイヌ語で淑女の意味である。

はじめに

私がこの調査を行ったのは2019年(令和元年)5 月から9月までで、主に北海道日高地方にある平取 町二風谷に暮らすアイヌ民族の方々を含む計17名で、 私自身が普段から交流している方々が多く含まれてい る。

私がなぜこの調査を行うことになったかと言うと、 私が尊敬してとてもかわいがっていただいた、釧路市 阿寒湖温泉でアイヌ彫刻を生業としていた故藤戸竹喜 氏が2018年10月に病のため亡くなったのがひとつ の大きな引き金になった。尊敬し親しく交流をしてい たフチ (おばあさん)、エカシ (おじいさん)の生い 立ちなどを余りにも知らずに来ていたことを痛感した。 大切な方々が一人ずつ突然亡くなっていき、私の両親 の時も何も聞かずして亡くなってしまい後悔をしてい た。このままでは同じ失敗を繰り返すことになるので はないかと思い、私にとっては無謀な挑戦ではあった が敬愛するフチ、エカシの聞き取り調査を初めて行う ことにした。

アイヌ民族である私自身がウタリの方々に聞き取り をすることによって和人研究者に語る内容とはまた 違った内容が聞けるのではないかと考えた。私自身が アイヌ差別に苦しんだ経験上、同じ痛みを持つものと して胸懐が聞けるのではと考えたからである。聞き取り調査を行うことによってアイヌ民族の内側からの体験や経験を後世に残すことが必要と考えたのだ。

いまを生きるアイヌの古老たちの体験してきた アイヌ文化、伝承、歴史を知ることで、平取町二風谷 の歴史を知ることにもなるだろうと思っている。私は、 生活をするなかでのアイヌの習慣や思い出が一番大切 だと考えたのだ。一般的に名前は知られていない方々 の生活の中にあるアイヌプリ(アイヌの習慣)などを 聞き取った。

萱野れい子さんとの関係

私と萱野れい子さんとの出会いは、私が31歳の2月(2001年)だったと記憶している。萱野茂氏(1926年~2006年)の著書『アイヌの碑』を読み、故萱野茂氏に会いに行ったことからはじまる。私自身、両親の離別により父親に育てられ母親との関わりをあまり知らずに育ってきたので萱野れい子氏のことは、自分の母親の様に慕っては心を開いて話すことができるフチなのである。

萱野れい子氏の略歴

1931年(昭和6年)

奥尻島出身。8人兄弟の上から6番目。姉が3人、兄が2人、弟が2人。生まれたのは奥尻島だが後すぐに両親の故郷である沙流郡平取町二風谷で暮らすことになり、それから90年以上二風谷で暮らしている。20歳で後にアイヌ文化研究者で参議院議員となる萱野茂氏と結婚し二男一女をもうける。1971(昭和46)年日胆地区ウタリ民芸制作技術コンクール大

会織物の部第2位入賞、1985 (昭和60) 年職業訓練 指導員免許(織布科)取得、2004 (平成16)年平取 町教育文化功労賞受賞、財団法人アイヌ文化振興・研 究推進機構より平成22年度アイヌ文化賞を受賞し女 性の手仕事の復元や伝承活動が高く評価されている。

インタビューについて

調査は令和元年5月から9月半ばまで行い、平取15名、阿寒湖1名、札幌1名のインタビューを行った。 萱野れい子氏を中心に、彼女と親しくお付き合いをしている方や、彼女の連れ合いである萱野茂氏と交流があった方々を選んだ。

インタビューの時間や場所は話し手の生活の邪魔にならないように都合のいい場所を選んでもらい、ほとんどの場合、体力的な問題を考え1時間とした。講義前の二風谷アイヌ語教室や話し手の方のお宅、さらに萱野れい子氏宅もお借りして数名の方の聞き取りをさせていただいた。インタビューは必ず事前に承諾を得て録音した。

インタビューで、まずご自身の生い立ちなどをお聞きし、学歴などは余り聞かずに、幼少期の両親の職業や、アイヌ式の儀式を観たり参加したりした経験を聞くことにしていた。さらにいま現在のアイヌ文化への取り組みや関わり、二風谷のアイヌ社会の流れ、なぜアイヌ文化に関わるようになったのかなど心の変化なども質問した。最後には必ず萱野家の思い出や関わりなどを聞いた。できるだけ今現在の日々のアイヌの生活を聞くことに努めた。萱野家の思い出などを聞くとやはり二風谷の歴史の流れにも繋がってくるのである。例えば、チブサンケ(舟おろしの儀式)に参加した話やアイヌ語教室参加、二風谷ダムの話などが出てきた。

さて、この聞き取り調査で初めて私がインタビュアーとなり立場が逆転したのだ。幾度となく私もあらゆるインタビューに答えて来た経験上、アイヌウタリ(アイヌ民族)でメディアに露出したことのある者なら多く経験したであろうが、私自身もアイヌの被差別体験に関する偏見に満ちたインタビューによって傷ついた経験もあったことから、あえて私から差別の話は聞かないことをまずひとつの信条とした。話し手に聞き、文字化してもいいかなども確認した。

初期の聞き取り調査では敬語を使い聞いていたが、 話し手を緊張させてしまったのでいつもの雰囲気のま までいくことにし、口調もラフなものにしてお互いが 緊張しないように努めた。

一番注意を払ったのは、出来るだけ調査対象者が嫌がる質問を避けたことである。私が聞きたかったのは、生活の中で経験し生きてきた素朴なアイヌの思い出であり、アイヌの精神文化や地域のウタリ(同族)の関わりが聞きたかったのだ。この調査は当時のアイヌ民族の生活水準を測るものなどではない。過去の辛い思い出を書き連ねるだけの報告書などにはしたくなかった。この聞き取り調査報告書を話し手の家族が数十年経ってアルバムのように開き、思い出のひとつとしてもらいたいと考えた。同時に、インタビューの内容は平取町二風谷のアイヌ民族の歴史であるわけで、アイヌ民族の生活を興味本位でのぞくものにはしたくなかったのである。

インタビューをしてみて、普段はほとんど表に出ないアイヌ民族の方がとても鮮明に儀式などを覚えており、失礼ながら、いつも表に出ている方のように話は洗練されているわけではないのだが、とても心を打たれる話が多かった。ほとんどのアイヌウタリの方々が直接ご自身の言葉で話してくれ、表に出ることが少ない方の人生を垣間見ることができた。取材をとおしてアイヌ式の葬式や儀式などを経験した方がいて、その時の心情を直接聞くことが出来たのは私自身貴重な体験であった。もはや歴史として書かれた本の中でしか読んだことがないような体験を直接聞くことで、生きたアイヌ民族の生の声とアイヌ文化を大切にして残そうとしているその姿に畏敬の念をも感じたのだ。そして話し手の方々の強く静かなる差別や偏見への怒りも感じたのだ。

この聞き取り調査を行う上で苦慮したことが多々起こったことも事実である。「この聞き取り調査をしてお金儲けをするつもりなのか?」や「個人情報をなぜあなたに話さねばならない」などの言葉もかけられ聞き取り調査をしてアイヌ民族の歴史を残したいという意図を理解してもらうまでかなり苦労した。それはアイヌ民族の悲しい歴史の中で、研究者やマスコミに良いように使われてきた経験が多かったためか、ウタリのことも信じられないほどの人間不信によるものだ。2020年に一冊目の報告書を出すまで、本心では私を信じてはいない話し手の方もいたのは確かである。この報告書を実際に手に取り読んで、やっと私を信じて涙を流した方や感謝の声まで頂いた。アイヌウタリをも信じられない人間不信を抱えているのだろう。

草薙美壽子さん

2020年の報告書ではページ数の都合により一人一人の聞き取り内容を全て書くことが出来なかったが、ここで私が最も印象に残った方のお一人として草薙美壽子さんがいる。

草薙美壽子さんは 1938 (昭和 13) 年生まれ夕張市 紅葉山出身。5歳で平取町荷負(におい)本村に暮ら すことになる。子どものころからアイヌプリの儀式な どを多く見て育つ。父親が晩酌時に囲炉裏で濁酒を捧 げてカムイノミ(儀礼)していた。子どものころに西 島てるさんや近所のフチやエカシにユカラ(英雄叙事 詩)を聞かせて貰う。自身は流暢にアイヌ語を使うこ とは出来ないが何となく話の内容は解っていた。冬、 霜柱の立つ中、裸足で薪を拾いにも行った。靴を買う ことも出来なかったのだ。12歳から奉公に出て恵庭 で働くが、体が弱く入退院を繰り返して20歳で病気 のために肺も摘出したのだという。二風谷ダム(沙流 川ダム)では発掘の作業員として働き、発掘現場で人 骨が出ると菅野茂さんらを呼んで来る係でもあった。 萱野茂さんら男性らが供養をしていた。発掘現場周辺 には昔アイヌの墓地があった。発掘現場では18年間 務めた。

1972年の札幌冬季オリンピックでは二風谷のウタリと一緒にアイヌ舞踊も披露している。「ホリッパ(踊り)して来たんだよ」と懐かしそうに話して頂いた。この聞き取り中には唄や口承文芸レパートリーを披露してくれアイヌの節回しとその独特の唄声を聞いた。カムイユカラ(神謡)「蛍の婿選び」、ヤイサマネナ(即興歌、叙情歌)、男性が唄うカムイユカラを唄い聞かせてくれたのだ。萱野茂二風谷アイヌ資料館の前にある縁結び石のお祭りやシンヌラッパ(先祖供養)でイユタ(穀物を臼と杵でつく)をし、高きび、稗、栗でシト(団子)も作った。

草薙美壽子さんとは私自身この聞き取り調査の時まで挨拶程度の会話しかしておらず、この調査で初めてじっくりとまでは言えないがプライベートな話を聞くことが出来た。アイヌの方々は皆さんそうであるが、かなりの苦労をして来ている。その中でも草薙美壽子さんの生い立ちは過酷とも言えた。また引き続き話を聞きたいと連絡を取りたかったのだが、2021(令和3)年5月に病気のために平取町の病院で亡くなられた。今回の報告では、娘さんから承諾を得ることがで

きた。このように尊敬するエカシやフチが亡くなることは寂しくも悲しいことである。

貴重な話を聞けたことに心より感謝する次第である。 草薙美壽子さんは聞き取り調査途中に涙を流し、声を 詰まらせ生い立ちを話して頂いた。

草薙美壽子さんのご冥福をお祈りいたします。

貝澤ユリ子さん

貝澤ユリ子さんは、1942(昭和17)年生まれ、5 人兄弟の上から2番目。平取町上貫気別で生まれ、現在地名は平取町旭となっている。2歳で平取町芽生に引っ越し17、18歳ぐらいまでそこで暮らす。父親は福島県郡山から入植した和人で、母親は沙流郡日高町倉富出身(旧門別町倉富)のアイヌ民族女性である。幼少期柾葺きの簡単な作りの家に住んでいたという。父親が炭焼きの窯を3カ所持っていたので、木材を求めては窯の場所を変えて暮らしていた。母親はヤイサマ(即興歌)の名手でその音声は現在、平取町立二風谷アイヌ文化博物館に遺されており、ご自身でも母親の音源を持っている。

ユリ子さんは 17歳で二風谷のアイヌの男性と結婚。結婚後に河東郡士幌町に開拓農家として入植し、延べ6、7年士幌町で「大正金時(豆)」、ビート、牧草などの生産をする。1965(昭和40)年ごろに再び二風谷に戻り現在に至る。アイヌ舞踊を40年位前から始める。平取アイヌ文化保存会には設立当初から関わっている。入会当初から主に踊り手として活躍していたが、60歳からは歌い手になった。それからは唄を唄っている。平取アイヌ文化保存会で各地に招聘されて行くのが楽しいという。保存会設立当初の歌い手としていつも萱野れい子さんら二風谷のフチ5名が唄っており、その歌声の何とも言えぬ深みがありそれが忘れられないという。一時期ではあるが保存会でユリ子さんの母親と娘とで親子三代揃って活動している時もあり、感慨深い思い出となっている。

平取町立アイヌ文化博物館前の二風谷コタンのチセ (家)でトマ(ゴザ)編みやサラニブ(袋)編みの実演 を三年間行っていた。海外客や日本各地から来る観光 客と話すのが何より楽しかったという。トマ編みやサ ラニブ編みの講座の講師も務める。子どものころはト マの材料となるガマも二風谷に沢山自生していたが、 最近はめっきり見かけなくなったという。そして現在 二風谷の自宅で同居している孫が(2018年当時4歳) 二風谷コタンにあるバッタリ(精米用具)を気に入り、毎日バッタリを見に行くのだという。そしてバッタリにおやつをあげると言い出し、これもまたアイヌプリの物にも感謝しカムイとしてあがめているように私は思えてならない。それが現代を生きる孫にまで伝承されていることに驚きそして嬉しく思った。その昔は二風谷にはバッタリが20台以上あったという。2021(令和3)年現在二風谷にバッタリは2台設置してある(萱野茂二風谷アイヌ資料館と二風谷コタンに在る)。なお、バッタリとは川の水を引き水力により稗や栗などを脱穀する杵と臼を兼ね備えた機械である。水力により水車が回り杵を持ち上げ、臼の中にある穀物を脱穀する。その音がバッタリバッタリと聞こえるのでバッタリと呼ばれるようになった。

萱野茂さんとの思い出は、ユリ子さんが60代後半 の時に大阪府吹田市にある国立民族学博物館展示室の チセのカムイノミのために同行したことだ。その時菅 野茂さんが「みんぱくに行くのは今回で26回目だ」 と言っていた言葉をよく思い出すのだと。そして私に とってユリ子さんの一番の思い出は2018 (平成30) 年12月に行われたアイヌ語弁論大会イタカンローで 最優秀賞を受賞した時である。そのイタカンロー発表 当日にユリ子さんの車が盗難に遭い、直前には親族の 不幸などが重なっての受賞であった。イタカンローの 最優秀賞発表時に、ステージではマイクで何度も貝澤 ユリ子さんの名前を呼ぶも姿が見えずに当の本人はす でに控室に戻り帰り支度をしていたというのだ。朝に は車を盗まれ、午後には最優秀賞をもらうという天国 と地獄を味わっている。その後の聞き取りでもこの時 車を盗んだ犯人にさえ逮捕時に所持金も無かったと警 察から聞き「お腹減っていただろうに」と犯人をも心 配する心根がユリ子さんらしいのだ。

山本栄子さん

山本栄子さんの聞き取りは阿寒湖の娘さんのご自宅で行われた。栄子さんは、私と同じ十勝アイヌであることから勝手に私は親近感を持ち尊敬している。インタビュー当時、栄子さんは74歳。栄子さんの旧姓は清川という。父親は白糠郡白糠町のアイヌで母親が中川郡本別町のアイヌである。栄子さんが幼少のころに父親は海の事故で亡くなり、父親の顔も知らないのだという。実家は農家でいつも沢山の人が集まる家であった。お昼にはお茶を飲み「シチョチョイチョイ

ナ」と唄う豊年踊りを踊ったり、夜、大人たちはお酒 が入って輪踊りが始まったりと賑やかな家庭だった。

結婚後は阿寒湖アイヌコタンで民芸品店マッネシリ (雌阿寒岳)を経営していた。ご主人の山本文利さんがペンダントなどを制作していた。昭和 40 年代当時の阿寒湖のアイヌ民芸は飛ぶように売れる観光ブームであった。栄子さんがアイヌ舞踊を始めたのは 30 代のころに阿寒湖に嫁いできてからで、本別に暮らしていた時はアイヌ舞踊を踊ってはいなかった。当時の阿寒湖は観光ブームで各お店から一人踊り子を必ず出さなければならなく、必要に応じてアイヌ舞踊を始めた。1981~1982 (昭和 56~57)年は、夏は踊りで冬は阿寒湖のホテルでパートとして働いていた。

1992 (平成 4) 年から阿寒口琴の会を仲間 3名と設立し長く活動している。口琴の会では世界各地を訪れることになる。ウィーン (オーストリア) などヨーロッパ各地、モンゴル、アルタイ (ロシア)、キルギスタン、トルクメニスタン、ベトナム、アラスカなどアメリカ各地、台湾、北京 (中国) にも行った。サハは、国をあげて口琴に取り組んでいて口琴博物館などもあり、学校の授業でも口琴の授業があるのだという。サハの子どもたちは皆口琴が出来るのだと話してくれた。口琴の素材では、ロシア、アメリカなどは鉄製の口琴が多く、ヨーロッパは竹製が多いのだという。3~4年に一度、世界のどこかで口琴大会が行われている。

1995 (平成7) 年、中国北京で行われた第4回世界女性会議でもアイヌ女性としての現状を話し、ムックリ (口琴)も弾いてきた。世界女性会議には各国の女性が集まって来ていた。きらびやかな民族衣装を身にまとっていたアフリカ女性などと記念撮影を撮るなど交流を深められたことが思い出になっている。

1964~1965 (昭和39~40) 年の冬季間だけ東京都台東区浅草橋の装飾問屋に出稼ぎに出かけていた。その1965 (昭和40) 年に東京都世田谷区で庭石の展示会が行われた時に、萱野茂さんがその会場に来るのを新聞で知り出かけて行き、萱野さんとお話をすることが出来た。一緒にお食事までして、その会話の中で萱野さんが当時アイヌ語研究をしていた金田一京助氏の元で働いており、金田一氏がペウレウタリの会で講話をされると聞き、どうしても会いたくなり、友人づてに聞き、やっとペウレウタリの会にたどり着く。

当時、東京を拠点として活動をしていたペウレウタリの会に入会することとなり、会員になって50年

以上が経った。入会当初はアイヌと和人の仲間同士のいざこざもあったりもしたが、単なる親睦会ではなく差別をなくすために活動をすると決めてからは上手く行くようになったという。ペウレウタリの会員となってから自分に自信を持てるようになったという。「アイヌだからと差別されるいわれは無い」と思うようになった。若いころの差別の悔しさなども才能溢れる方々との出会いで大きく変わり、自身をも肯定出来るようになり、現在はそのアイヌ民族の伝承を若いウタリに伝える立場となり人材育成に力を注ぐ立派なフチとなり、2022(令和4)年1月にはウポポイ内にある体験交流ホールのイベントで私は初めて栄子さんのムックリ演奏を直接聴いた。その力強く美しい音色のムックリ演奏にベテランの域を見た。

木幡サチ子さん

私と木幡サチ子さんとの出会いは、萱野茂さんの自宅かアイヌ語教室だったと記憶している。その当時すでに70代後半だったように思うが萱野家に来るときはいつも自家用車であつた。36歳で自動車免許を取得し、車の運転が得意で4トントラックの運転手もしていて、当時女性のトラック運転手は非常に珍しかったという。本人曰く「とてもモテたんだよ」とのことだ。いつまでも私の名前を覚えてくれずに「帯広の娘」と呼ばれている。

一度だけ私はサチ子さん宅に泊まらせて頂いたことがある。2012(平成24)年度アイヌ文化賞を受賞した祝賀会の夜である。サチ子さんは当時82歳。冬の寒い日に平取町貫気別の自宅近くのカラオケ店で二次会をしたのだ。サチ子さんはご機嫌で天童よしみなどの歌を歌いビールを飲んでいた。サチ子さんは若いころから愛飲家だったという。いまはお年のせいかビールを飲むこともなくなったようだ。

サチ子さんの両親はともにアイヌ民族である。子どものころ、家庭では父親のことは「たけやん」と呼び母親のことは下イヌ語で「ハポ」と呼んでいた。なぜたけやんと呼ぶのかと質問すると近所の大人たちが皆たけやんと呼んでいたので自分も真似をしたそうだ。父親は働き者ではあったが、お酒を飲み時折母親を殴るのでどうしても好きになれなかったという。父親がお酒を飲んで帰ってくることが分かると炉縁に有った火ばさみなどを急いで隠したりもした。子どものころは仕掛け罠を作って鳥を捕り羽も自分でむしって食べ

たり、近所で飼っている馬が亡くなると、その肉を貰いに近所中のみんなが行き肉を貰い、あばら肉は焼いたり、煮て塩で味付けをして食べたりもしていた。

サチ子さんが 16歳の時に母親が 43歳で亡くなり、その1ヶ月後に 47歳の父親も病気で亡くなった。父親の酒癖の悪さを見ていたことから自身が結婚するときはお酒を飲まない人と結婚すると若いころから決めていたので本当にお酒を飲まないご主人と結婚をした。両親亡き後は親戚の家で暮らす事となるが、朝3~4時から農家の日雇いに行きとても苦労した。貧乏になるとは大変なことだと痛感したという。その時に初めて貰った 24円の給料と白足袋がとても嬉しかった。その時の白足袋は今も記念に大切に保管しているという。

1990 (平成2) 年ころに菅野茂さんご夫婦と一緒に 登別ケーブル株式会社の仕事に行き寮での食事作りを した。料理は得意ではないが、菅野れい子さんや茂先 生が居たので引き受け、サチ子さんは車の運転手が主 な仕事であったが、れい子さんにおからの煮物の作り 方を教えてもらったことが懐かしいという。サチ子さ んは平取アイヌ文化保存会の一員として北海道各地に 招聘されて、踊った後にあちらこちらのアイヌ料理を 食べてきたが、やはり菅野れい子さんが作ったアイヌ 料理が一番おいしいという。萱野れい子さんが昔、サ チ子さんの車に乗せてもらうといつもアイヌ語の CD でユカラが流れ「いくつになっても勉強をして大した ものだよね」と感心していたことを思い出す。そし て90歳を超える今現在、サチ子さんは足がちょっと 不自由になり車椅子となったが、夏季には二風谷コタ ンで行われる、「ユカラと語り部」で上演し、平取町 二風谷アイヌ語教室の講師も務める。いまも平取町立 二風谷アイヌ文化博物館から音源を借りてユカラなど を練習しているのだという。「人生はいつまでも学び」 を実践している方である。現在、国立アイヌ民族博物 館基本展示室の6つのテーマ「私たちのことば」にあ る囲炉裏の展示ブースで、サチ子さんがウウェペケレ (散文説話)を語っているゾーンがある。

萱野れい子さん

私が萱野家に出入りするようになってから、れい子 さんはいつも私の好きな食べ物を用意しておいてくだ さっていた。私がアイヌ料理で1番好きなシト(餅) を作っては、私が二風谷に到着するのを待っていてく れた。シト作りは前日からイナキビを水に浸け、炊いてからも捏ねて餅にする作業がかなりの肉体労働であるので、「最近はシトが作れなくなったよ」と言う。そのつぎには私が好きなカレーライスを作ってくれるようになった。そしていまは出来るだけ私がれい子さんに手料理を作り恩返しをしている。そして、れい子さんが作るアイヌ料理は本当においしいと評判である。昔のチブサンケ(舟おろしの儀式)などのアイヌ関連のお祭りではほとんどれい子さんが仕切って料理を作っていたものだという。

今回れい子さんの聞き取りを行い、思いがけずイギリス人医師マンロー氏の名前が出てきた。れい子さんが4歳のころに囲炉裏に鍋を吊るそうとし鍋の耳がスワッ(炉鉤)に引っ掛かり右手の甲に大火傷をしたときにマンロー医師に診てもらったことを記憶している。その治療の帰りにマンロー医師からひとつのクッキーを貰った。当時クッキーなど見たこともなかったのでとても嬉しかったそうだ。

若いころ、カンカン沢近くで開墾の作業をして就寝しようとすると体が痛くて痺れたが、朝になったら治ったという。気力で治したのであろう。「それぐらい働けるだけ働いた」という。あの小さな体で畑起こしをしていたのかと思うと胸が痛くなる。その開拓当時の楽しみのひとつとして町のお祭りがあった。カンカン沢から馬車に乗り、義経神社や富川の浜まで行ったことがあるという。

昆布を採りながら遊んでいたとき、急に足元が深くなり溺れかけた。れい子さんは、あの海は「おっかない(恐ろしい)ところ」だと思い、その経験から以後、海には入っていない。当時、昆布は生のまま持ち帰っていたという。生なのでかなりの重量があったろう。どのように持ち帰ったのかは記憶にないという。

同じ開拓当時の思い出に、自宅で綿羊を飼っていたことについて話をしてくれた。「兄貴が外でストーブを直していたらその後ろから走り飛んで突いていき、飛ばされる兄貴を見て笑っていたの」その綿羊で姉はセーターや靴下などをよく作っていた。れい子さんの子どもが幼稚園に通う通園路にも綿羊がいて、子どもが突かれたことがある。「綿羊はふさふさしていて可愛いしょ、でもあれからは綿羊はおっかない」と思い、近付かなくなった。れい子さんも綿羊の毛で靴下や手袋など小さな物を作っていた。

れい子さんが茂さんと結婚をして、いきなり大家族 の食事作りが日々の大事な日課になった。朝は皆で食 事をとる形ではなく一人一人起きてくると食事を出していたので、まだ起きて来ない家族の為におかずなどを隠したりもした。更には毎日の水汲みも大変だった。家はなだらかな高い場所にあり、下に流れる沢まで水汲みに出掛け、お風呂用の水まで汲みに行っていた。ある時、れい子さん宅でも井戸を掘って水が出たときの嬉しさはいまも覚えている。沢から水を台所にひいたこともあった。

当時、水汲みは女性や子どもの大事な仕事であったが、冬は手がかじかんで子どもの力では大した量の水を運ぶことなど出来なかったであろう。大変重労働な家事でもあった。私が初めて萱野家に行った当時はまだ萱野家の水道は沢から引いていたので、れい子さんが台所の蛇口からザブザブと水を出して洗い物をしていたこともまた思い出される。

話は変わるが、その昔、二風谷には民宿が一軒も無かった。それゆえ萱野家を宿代わりにして泊まる方が多かった。多いときは萱野家に最高で22人が泊まったという。はじめのころは家族の布団まで貸して、家が狭かったので、玄関の方まで布団をひいてお客さんに寝てもらうことがあった。いつかお金が出来たらお客さんに布団で困らせないようにしたいと考えていた。そんな萱野家の二階には大きな布団部屋が出来、いまは布団が山積みになっている。れい子さんは泊まるお客さんの丹前や浴衣も一枚一枚全て手作りをして揃えた。

萱野れい子さんは、若いころから夫である茂さんとともに当時すでに伝承者がいなくなっていたアイヌ民族の着物の復元のために古い着物をほどき、縫い方などを再現した。茂さんはアイヌ男性の、れい子さんはアイヌ女性の手仕事にとりかかり、複製をして伝承を守ってきたのだ。90歳を超えた今現在でもれい子さんは手を止めることなく日々アイヌの手仕事を続けている。十数年前には長年手仕事を続けたことによる腱鞘炎で両手の手のひらの手術もしている。

れい子氏が先日も私に話してくれたのだが「わちは話は上手くできないよ。手だけ」と言って手仕事の手を休めることをしなかった。90歳になるれい子さんだがいつも手仕事を続けており、今年(2021年)も地元のウタリ女性に自宅で着物(カパラミブ)作りを教えている。私にはとうてい真似ができないことで頭が下がる思いである。

私は何か人生の壁のような物に突き当たると何故かいつもれい子さんに会いたくなる。それはれい子さん

がいつも静かに優しく包んでくれるからだ。れい子さんは愛情に溢れた素晴らしい人だ。出しゃばることもせずにいつも静かに見守ってくれる人である。これからもお元気で暮らしていて欲しいと願うばかりである。

おわりに

いま私は2年ぶりにこの調査での聞き取り調査の 録音テープを聞いている。亡くなった方もいてすでに 貴重な肉声記録ともなっている。

出来るだけ今後も萱野れい子氏などの記録を残し、 また古老の方々の話を聞いていきたい。これからもで あるが、何度聞いてもこれで終わりとは思えず、また フチやエカシの話を聞きたいと思うのだ。やはり私は 聞き取り調査が好きである。

いまもなおアイヌ自身が精神文化を受け継いでいることを改めて感じたものだ。ほとんど母親の幼少期の話は聞いておらず知らないのだが、「子どものころ靴が無く裸足で歩いて学校に行った」と母親自身から聞いたことがある。私は子どもだったのでそんなことはない! そんな人はいない! と思っていたが…実際はそんな時代だったのであろう。いま両親が生きていたら、もっとアイヌ文化や地域のアイヌの話を聞きたかった。私の父親は帯広のアイヌであり、狩猟免許を持ち鹿猟をしていた。母親は音更のアイヌで若いころは阿寒湖アイヌコタンでアイヌ舞踊と唄を披露していた。

アイヌ民族の先人は、アイヌ文化の宝物。

私はこのようなインタビューをとおして、つくづ く痛感する。

これからもインタビューを続けていきたいと考えている。

謝辞

本調査にあたり快く応じ話をしていただき場所を提供してくださった萱野れい子氏やウタリ (同族) の方々ならびにシサム (和人) の方々に心より感謝申し上げます。

調査記録の再編集を進めるようアドバイスをくれた 国立アイヌ民族博物館のアソシエイトフェロー谷地田 未緒氏、是澤櫻子氏にご協力いただきありがたい限り です。 校正には国立アイヌ民族博物館展示企画室長田村将 人氏が担当してくださり心強く安心して報告書をまと めることができました。

たくさんの方々のおかげでこの報告書が、またこれ まで以上に大きな日の目を浴びることができ、私の背 中を押してくれています。

まだまだ未熟で不勉強な私ではありますが、これからも聞き取り調査を続けていき諸先輩の言葉を微力ながら残していきたいと思います。

ソンノソンノ イヤイライケレ (本当にありがとう ございます)。

雪がふる白老にて。

参考文献

朝日新聞社アイヌ民族取材班 1993『コタンに生きる』 岩波書店 在本彌生 村岡俊也 2017『熊を彫る人 木彫りの熊が誘うアイヌ の森 命を紡ぐ彫刻家・藤戸竹喜の仕事』小学館

『エカシとフチ』編集委員会 1983『エカシとフチ 北の島に生きた ひとびとの記録』札幌テレビ放送株式会社

内田順子 2020 『映し出されたアイヌ文化 英国人医師マンローの 伝えた映像』吉川弘文館

貝澤正 1993『アイヌ わが人生』岩波書店

萱野茂 1975『おれの二風谷』すずさわ書店

1978『アイヌの民具』すずさわ書店

1987『アイヌの里二風谷に生きて』北海道新聞社

1990『アイヌの碑』朝日文庫

1994『妻は借りもの』北海道新聞社

2002 『萱野茂のアイヌ語辞典増補版』 三省堂

2002『アイヌのイタヶタクサ 言葉の清め草』冬青社

2003 『五つの心臓を持った神 - アイヌの神作りと送り -』 小峰 書店

2005『イヨマンテの花矢』朝日新聞社

2005『アイヌ・暮らしの民具』株式会社クレオ

2017『アイヌ歳時記:二風谷のくらしと心』 筑摩書房

2020『アイヌと神々の物語 炉端で聞いたウウェペケレ』山と 渓谷社

萱野れい子 2008 『写真で綴る 萱野茂の生涯 アイヌの魂と文化 を求めて』農山漁村文化協会

茅辺かのう 1984『アイヌの世界に生きる』 筑摩書房

北の生活文庫企画編集会議 編 1997『北の生活文庫 2 北海道の 自然と暮らし』北海道新聞社

計良智子 1995『アイヌの四季 - フチの伝えるこころ』 明石書店

笹村律子 2020『二風谷のフチ萱野れい子とカッケマッたち』(令和 元年度公益財団法人アイヌ民族文化財団研究・出版助成事業報 告書)

菅原幸助 1966『現代のアイヌ:民族移動のロマン』現文社

遠山サキ+弓野恵子 2019『アネサラ シネウァソロ~アイヌとし て牛きた遠山サキの牛涯~ 地瀬社

田村すず子 1996『アイヌ語沙流方言辞典』草風館

高畑直彦 七田博文 1988 『いむ - アイヌの一精神現象』高畑直彦 鳩沢佐美夫 1995 『沙流川 鳩沢佐美夫遺稿』 草風館

ベウレ・ウタリの会 50 年記念誌編集委員会 2016『ベウレ・ウタリの会 50 年記念誌』 ベウレ・ウタリの会 50 年記念誌編集委員会 平取町 1974『平取町史』 平取町

2003『平取町百年史』平取町

藤村久和 1995『アイヌ、神々と生きる人々』小学館

【資料】

(発行当時の原文のまま掲載しています。イラスト、一部写真は掲載していません。)

令和元年度 研究・出版助成事業報告書

二風谷のフチ菅野れい子とカッケマッたち



笹村 律子 公益財団法人 アイヌ民族文化財団

画像:発行された報告書の表紙

令和元年度 公益財団法人アイヌ民族文化財団 研究・出版助成事業報告書

『二風谷のフチ萱野れい子とカッケマッたち』 著者 笹村 律子 公益財団法人 アイヌ民族文化財団

はじめに

この報告書は、私が2019年5月~9月までの間に、 空取町二風谷に暮らすアイヌウタリを中心に、17名の方々から聞き取った内容をまとめたものです。

私が平取町の二風谷に通い始めてから、かれこれ 20年になります。通い始めたきっかけは1冊の本と の出会いでした。

その頃は父を亡くしたばかりで、一人ぽっちになり 寂しい思いをしていた時期でした(母は先に他界して います)。

一人になってこれからのことを漠然と考えたり両親 との思い出に耽る日々を過ごしている中で、自分は何 者なのだろうかと考えるようになって、生前の両親からはアイヌである自分のルーツについては何一つ聞かぬままでいたことに気が付き、そのことを後悔しました。

それからは、自分のルーツが知りたくて毎日のよう に図書館へと足を運ぶようになりました。

はじめの頃は図書館で目についた著名なアイヌ研究 者の本から読み始めたのですが、共感できるところは 多くはありませんでした。それでもアイヌと名の付く 本を手当たり次第に読んでいたら、ついに萱野茂さん が著した『アイヌの碑』(朝日新聞社、1980年)とい う本に出会えました。

私はこの本を夢中になって読んで、ページをめくる たびに涙があふれ止まりませんでした。理不尽な差別 に苦しんでいるのは私だけではないことを知りました。 この本と出会って以来私は萱野さんに会いたくて仕 方がなくなり、思いきってドキドキしながら萱野さん

宅に電話を掛けてしまいました。

その一週間後には萱野さんのお宅にお邪魔していて、 初対面にもかかわらず萱野さんは私を温かく迎え入れ てくれました。会ったばかりの萱野さんに、これまで 受けた差別のことや父親の死からこれまでの出来事を 聞いてもらっているうちに、私は泣き出してしまいま した。

泣いている私に萱野さんはニコニコと穏やかに微笑 みながら「律子さんはアイヌ嫌いのアイヌなんですね。 私も昔はアイヌが嫌いなアイヌでしたよ。でも私に 会ったらアイヌのことが好きになったでしょう」と声 をかけてくれました。

それ以来、度々萱野さん宅を訪れるようになって、 泊めてもらうようにもなりました。あるとき萱野さん から「うちには好きな時に来て、帰りたくなったら帰 りなさい。お腹が減ったら勝手に釜を開けてご飯を食 べて、お客さんが来たらお茶を出しなさい。あなたの ことは家族だと思っています」と嬉しい言葉をかけて 頂きました。それからは本当に自分の家のようにさせ てもらっています。

萱野さんとの奇跡的な出会いをきっかけに、二風谷にたくさんの友人、知人が出来ました。すべて萱野さんのお陰だと感謝しています。

そんな萱野さんとの日々でしたが、萱野茂さんは

2006年5月に肺炎のため亡くなってしまいました。

ここで、またしても私は後悔することになります。 と言うのも、萱野さんから「二風谷に来て私の資料館 を手伝いなさい」と声をかけて頂いていたのに、「山 奥で暮らしたくない」とか「携帯電話がつながらない のがイヤ」ということを理由にして断り続けていたか らです。

萱野茂さんが亡くなったことで、アイヌ文化を学ぶ 道標も失ったように思えて、しばらくは父を亡くした 時と同じように途方に暮れていました。

2015年に、萱野茂先生の活動には足元にも及ばない、私なりのやり方ではありますが、帯広市で「アイヌ勉強会ラムピリカ」という会を始めました。

アイヌ文化に触れてアイヌの理解者になって頂きたい、そしてアイヌのお友達を作って欲しいとの想いからです。

帯広市にはシサム(和人)の方がアイヌの事を知り たいと思っても実際にアイヌ文化に触れられる場所が なかなかありませんでした。

そこで私が友人 3 人を誘ってラムピリカを始めました(2015 年 4 月ラムピリカ立上げ)。

その会員も 2019 年現在で 15 名ほどになりました。 私の会ラムピリカでは、アイヌ料理やアイヌ刺繍、 アイヌ語、アイヌの歴史、アイヌ彫刻などの体験講座 を月に 2 回開いています。

講師には出来るだけウタリの方を招いて、色んなお話を聞きながら直接アイヌ文化に触れて頂くようにしています。

地道な活動ではありますが、このような活動をする ことで少しでもアイヌの仲間を増やしていきたいと 思っています。

北海道に住んでいる多くの人たちは、以前の私と同じように開拓期以前の北海道の歴史を知らずに生活していると思います。私自身も学校などで教わった憶えはありませんので仕方がないのですが、そのような歴史や文化を知ることは大事なことだと思っています。

師と仰いでいた萱野茂さんから直接お話を伺うこと はかなわなくなってしまいましたが、茂さんと長年連 れ添ってきた大好きな萱野れい子おばあちゃんをはじ め、長年二風谷に住んでいるエカシやフチの方々から お話を伺うことで、二風谷の歴史を学べるのではない かと思い立ち、重い腰を上げて、今回この聞き取り調 査に取り組んでみることにしました。

聞き取り調査にご協力いただいた方々は、全部で

17名です。聞き取りに要した日数は17日間で延べ29時間に及びました。振り返ると、この夏の休日はほとんど二風谷に通っていたことになります。

聞き取りの内容ですが、私はアイヌ研究者ではないので専門的なことはほとんど聞いていません。主にご 自身の生い立ちやアイヌ文化との関わり、萱野家との 思い出などを話して頂きました。

萱野家との思い出話を聞きたかったのは、二風谷の歴史を萱野家と二風谷の皆さんとの関わりを通じて、より身近なものとして学ぶことができるのではないかと思ったからです。

お話を伺っている間は終始録音もさせて頂いていた ので、私とのたわいのない会話も録音されています。 今から 20 年、30 年も経てば、これも何かの役に立つ かもしれませんので、大事にとっておこうと思います。

聞き取り調査に取り組んだのには、萱野茂さんやれい子おばあちゃんへの恩返しの気持ちもありました。 私は20代で両親を亡くしており、萱野夫妻を時には親のように思っていました。アイヌ文化に導いてくれた師でもあり、言葉では言い尽くせないくらい感謝しています。

今回の調査では、両親からは聞くことが出来なかったアイヌの先人たちの想いなどをたくさんの方々から聞くことができて、私はたくさんのイコロ(宝物)を頂くことができました。

このイコロを大切にこれからも育てていきたいと思っています。

今回は私が出会った17名の方々から伺ったお話のごくごく一部しか載せることが出来ませんが、この報告書にまとめさせていただきました。

藤谷るみ子さん



写真:令和元年5月12日 平取町二風谷の藤谷民芸店にて

昭和23年生まれ。平取町二風谷出身。

二風谷小学校、平取中学校を卒業されています。

子供の頃から常に織物が家の中にあって、小学校低 学年から母親の織機の横糸づくりを手伝っていたそう です。

その頃からアットゥシ (樹皮による織物)を作り始めていて、かれこれ60年くらいになるのだそうです。 萱野茂資料館の横のチセで実演販売の店を経営されていました。藤谷さんで3代目になるそうです。

萱野家とのエピソード

30代まではアットゥシばかりを織っていたそうですが、当時は毎日のように萱野茂さんへの取材があって、その際に萱野れい子さんが実演された、「シナの生皮を使った袋作り」を見る機会があったそうです。

翌日、同じものを作って茂さんに見てもらったところ、「そうやって、技術は目で盗むものなんだよ」と言ってくれたことが心に残っていると教えてくれました。

昔は萱野さんのチセ(家)でチブサンケ(舟おろしの儀式)を行っていたので、れい子さんの手伝いで200人分の料理を作ったこともあったそうです。

萱野れい子さんは、茂さんの体調が悪い時にコサヨ (粉粥) を作ってあげていて、消化が良くて栄養があっていいのだよと教えてくれました。

「わたしも、れい子さんのように現役で仕事を続けな がら歳を重ねて行きたい」と思っていることも話して くれました。

このほかにも、茂さんのおかげで倉本聰さんや立松 和平さんにお会いすることができたことや、茂さんが 国会議員だった頃の思い出、れい子さんのご両親の思 い出なども話してくれました。

れい子さんのご両親の家にはバッタリ (水力を使った穀物脱皮機)があって、いつも雑穀を挽く音が聞こえていたそうです。

アイヌ文化との関わり

子供の頃はペネイモ(イモ団子)を薪ストーブの上で焼いて、よくおやつに食べていたもので、焼けるときの匂いが懐かしいと話してくれました。家でボタモチを作った時は近所に配って歩いたそうで、ボタモチにアペフチカムイ(火の神さま)の炭の燠を置いて、火が消えないように息をフーフーかけながら急ぎ足で配ったそうです。当時は街燈もなく真っ暗だったけれ

ど、「アペフチカムイが守ってくれているから大丈夫 だからね」と母親に教えられたことを思い出して安心 して歩いていたのだと懐かしいエピソードも話してく れました。

萱野れい子さん



写真: 令和元年6月3日平取町のご自宅にて

昭和6年、奥尻島生まれ。

ご一家は、れい子さんが生まれてすぐに二風谷に 引っ越したそうです。

8人兄弟の上から6番目で、姉が3人、兄が2人、 弟が2人いたのだそうです。

父の名前は二谷善之助さんで、母は、はなさんだと 教えてくれました。

父親の仕事は、ウエンナイ沢の渡船場の仕事をしていたそうです。その渡船場は、現在は沙流川ダムの下になってしまっているのだそうです。

昔は炭焼きの仕事をしている人が多かったので、川 向へ炭焼きの方々を渡したり、色々な仕事をしていた ようだと教えてくれました。

当時はウエンナイ沢の下の方に自宅があって、チセで暮らしていたそうですが、弟が生まれたころに現在の二風谷小学校の辺りに引っ越して、木造の蔵のような建物で暮らしていたのだそうです。

当時はその辺りが一番大きな集落だったのだそうです。

れい子さんが 12 歳になった頃に、姉のはつめさんの旦那さんが亡くなったのに続いて、姉、母と 2ヶ月間に 3 人の家族が次々と亡くなってしまい、とても悲しい思いをしたことも話してくれました。

茂さんとは恋愛結婚だったそうです。れい子さんが 10代の頃から3年間お付き合いをして、れい子さん が20歳、茂さんが26歳で結婚されたそうです。

萱野家は二風谷一の貧乏人だったと言われ、こうした経済的な理由から、れい子さんのご両親からは結婚を強く反対されたそうで、最後まで賛成されぬまま嫁いできたのだそうです。

嫁いで来た萱野家は大家族で、茂さんとその両親、 第3人に妹が1人いたそうで、れい子さんを入れて8 人となり、ご飯支度も大変だったそうです。

家が小高いところにあったので水が引けないため、 下の方に井戸を掘って、毎日水汲みをしていたのだそ うで、ポンプで自宅前に水を引いた時は、本当に嬉し かったそうです。

当時の萱野家では、白っぽい芦毛の雄馬を飼っていて、茂さんの弟さんがお酒を飲みに行ったまま帰ってこなくても馬だけは帰って来るような本当に賢い馬だったそうで、とても可愛がっていたのだそうです。「ある日、その馬が脚を引きずっているので、脚の裏を見てみたら長い釘が刺さっていたのよ、可哀想に。あの馬には本当に助けて貰ったの。身体はおっきいけど優しくてね」と懐かしそうに話してくれました。

茂さんとの結婚生活では、いつも茂さんは外に働き に出ていて、自宅には余り居なかったそうで、「山の 仕事では飯場暮らしが多くて、家に居る時にはひっき りなしに来客があって、アイヌ文化に目覚めてからは、 アイヌの民具を購入するために色んなところに出かけ て行っていた」と教えてくれました。

茂さんが、稼いだお金をアイヌ文化を取り戻すためや、残す為に使っていたことについて尋ねてみたところ、れい子さんの答えは「男の人の決めることだものね、なんも心配してなかったよ。ちゃんと生活費は入れてくれていたし、互いに信じ合わなければ暮らせないべさ」というものでした。

茂さんが安心して家を空けることが出来たのも、れい子さんがいたお陰なのだろうなと思いました。

ただ、二風谷の方々からのお話を聞いてみると、茂さんは出張で海外に行っていても、毎晩れい子さんに 電話していたようで、とても愛妻家だったこともうか がえます。

茂さんに関しては、れい子さんも「私があの人の面倒をみたのは病院にいた時だけだよ」と話されており、茂さんは何でも出来る人だったのだそうです。

れい子さんが留守のときは、茂さんがお客様に自らお茶を入れたりしていたそうで、国会議員を辞めた後も変わることはなかったそうです。

茂さんはまた、仲人をすることが本当に好きだった そうで、50組ぐらいの仲人をしたのだそうです。

実は私も30代の初めころに、茂さんから「トマト農家でいい若者がいるから会ってみないかい?」と勧められたことがありました。その時お見合いをしていたら、私も今頃は平取でトマトを作っていたのかもしれません。

れい子さんは、平取の方々や茂さんと一緒に、仕事 や旅行でよく海外にも行かれていました。

フィリピンを訪問した際は、大統領主催のレセプションでアイヌ舞踊を披露したのですが、そのときに、アイヌの衣装に着替えた後、それまで着ていた服や靴、お財布なども盗まれてしまったのだそうです。アイヌ民族初の国会議員の奥様ですというような紹介もされていたので、まさか大統領主催の、警備もしっかりしている場所で盗難にあうとは夢にも思っていなかったと話してくれました。

パスポートと少しのお金だけは懐に入れてあって無事だったそうですが、履物は舞踊を披露する為の草履しか残っていなかったので、その後の観光は草履のままで続けたのだそうです。

落ち込むし早く帰国したいと思っていたそうですが、 手帳も一緒に盗まれたので、国会の議員会館に居る茂 さんに電話をしたくても番号がわからず、連絡するの も大変だったと話して苦笑いを浮かべていました。

その他にもれい子さんにはたくさんのお話をお聞き しましたが、とても強く私の心に残ったのは、「あの 人(茂さん)と一緒になって幸せだったよ」の一言で した。

時には声を詰まらせながら思い出話をしてくださり ました。どれだけの愛や絆で結ばれていたのでしょう か?

そしてれい子さんのお話を聞けば聞くほど私はれい 子さんをどんどん好きになっていきました。

茂さんもそうでしたが、愛らしくて、驕りのない心 の人だからです。

貝澤ユリ子さん

昭和17年生まれ。平取町 旭出身。 現在は平取町二嵐谷にお住まいです。

父親が炭焼きの仕事を営んでいたので、炭を焼く窯を3ヶ所くらい持っていたそうで、窯を変えるたびに近くに家を建てて暮らしていたのだそうです。



写真:令和元年6月8日 平取町の萱野れい子さん宅にて

今とは違って簡単な造りの家で、屋根は柾で壁が板 張りの家だったそうです。

父親は福島県郡山から入植して来た人で、母親は旧 門別町の庫富の出身だったそうです。

母親はヤイサマ(即興歌)の名手だったそうで、母親の声を、今も二風谷アイヌ博物館に残されている音源で聴いて感動したそうです。

「本当に声が良くて上手でね。だからいろんな人に 『母親はあんなに上手いのに何であなたは出来ないの よ』って怒られていて、必死になって練習している」 と話してくれました。

萱野家とのエピソード

ユリ子さんのお母様は、50代の頃に登別のアイヌ 資料館の「ユーカラの里」で茂さんと一緒に働いてい たことがあって、アイヌ舞踊を披露したりヤイサマ (即興歌)を唄ったりしていたそうです。

ユリ子さん自身は、40代の頃に一度、二風谷 アイヌ語教室に通い始めたのですが、その後、家事 や仕事で忙しくなって教室から離れていて、今から 4、 5年前にまた通うようになったのだそうです。アイヌ 語教室の雰囲気が好きなのだと教えてくれました。

ユリ子さんがアイヌ語教室に通った成果は、2018年のアイヌ語弁論大会イタカンローで最優秀賞の受賞という形であらわれました。私もその会場で聞いていましたが、ユリ子さんも母親譲りの綺麗な声の持ち主です。

ユリ子さんの初めてのアイヌ着物づくりも萱野れい子さんが指導したそうです。その着物を樺太でアイヌ舞踊を披露した時に初めて着たのですが、土砂降りの雨に当たってしまい、カパラミブ(切りぶせ着物)の白地に藍色が移ってしまったそうで、帰国後に色々と

処置したけれど元には戻らなかったそうです。

アイヌ文化との関わり

2019 年夏の NHK の TV ドラマ「永遠のニシパ」 では、フチ役として出演されています。

アイヌ語での台詞もあって大変だったそうです。松 浦武四郎役の松本潤さんからは、「カメラに映らない ので台本を下に置いたら良いですよ」とアドバイスが あったけれど、「緊張していてそれもままならなかっ た。でも、いい思い出になった」と話されていました。 ユリ子さんは松浦武四郎も大好きで、武四郎さんの 本を買っては勉強していたそうです。北海道命名 150 年の記念に北海道博物館で開かれていた松浦武四郎展 で踊ったことも記念になったと話されていました。

ユリ子さんはいつもチャーミングで可愛らしい女性 で、私の質問にも一つ一つ丁寧に答えて頂きました。



写真:女性たちによるシンヌラッパ(先祖供養)の様子

豊田礼子さん

昭和25年生まれ。北海道三笠市出身。

6歳で札幌市に引っ越して、大学卒業までは札幌市 にお住まいだったそうです。

高校卒業後に1年間和裁学校で和裁を学んでいた そうで、その後に江別の酪農学園大学に進学して、農 業経済学を専攻したそうです。

大学卒業後は公立小学校事務職として、日高管内の 小学校、中学校に勤務していたそうです。

子供の頃は、近くにアイヌの方がいなかったので、 アイヌ文化との関わりは、博物館の展示を見る程度 だったそうです。

初任地の三石の小学校ではアイヌの子供さんもいて、 普段はなんでもないのだけれど、運動会のフォークダ ンスの時にアイヌの児童が手を繋いでもらえないなど、 子供同士の差別があるのを見て、やるせない気持ちに なったと話してくれました。

萱野家とのエピソード

三石に住んでいた頃は、萱野茂さんが始めたアイヌ 語教室に興味を惹かれていたそうですが、遠くて通え ないのであきらめていたそうです。後に平取小学校に 転勤となり、知り合いの萱野春美さんからアイヌ文化 保存会へのお誘いがあって、入会を決めたと話してく れました。

また、シャクシャイン法要祭に行くときに木幡サチ子さんと知り合い、アイヌ語教室にも通い始めたそうで、以来 15 年以上アイヌ語教室に通い続けているのだそうです。

アイヌ文化保存会で最初にアイヌ着物を作った時の 講師が萱野れい子さんだったそうで、「保存会で借り られる着物は私には小さかったので、個人的にれい子 さんに講師をお願いしたら、とても親切に教えてもら えた」と話してくれました。



写真:令和元年6月8日平取町の萱野れい子さん宅にて

アイヌ文化との関わり

アイヌ文化保存会に入った当初は伝統舞踊も踊って いたそうですが、足を痛めてからは唄専門で、アイヌ 語で唄も唄うのだそうです。

イタカンロー(アイヌ語弁論大会)に出場して優秀 賞を2回受賞されています。自然の一員として生き ていくアイヌの文化が好きで、心地いいと話されてい ました。

樺太アイヌの楽器トンコリも手作りして月2回トンコリチーム「ノト」(アイヌ語で凪の意味)で練習したり、町の文化祭などにも出られています。今現在

も萱野家とは家族ぐるみのお付き合いをしているそうで、最近、れい子さんにエムシアッ (刀掛け) 作りなどの指導をしてもらったのだそうです。

豊田礼子さんは平取に住む素敵なシサムだと私は思いました。

山内正子さん



写真:令和元年6月9日平取町の萱野れい子さん宅にて

昭和18年生まれ。平取町長知内出身で旧姓は日川さん。

父親の名前は久太郎さんで、母親はきよさんだと教 えてくれました。

兄弟は7人で正子さんは上から3番目なのだそうです。

父親は長知内生まれで、母親は二風谷出身で旧姓は 貝澤さんだと教えてくれました。

父親はアイヌ協会が出来る時に農業委員などの役員 を担当していて、貝澤正さんらとアイヌ協会の会議な どにも参加していたそうです。

父親はとても世話好きで、代筆業務なども無料で引き受けていたのだそうです。

萱野家とのエピソード

萱野れい子さんとは、各国の先住民族間の交流のために平取アイヌ協会が主催した旅行で一緒にカナダへ旅行に行ったことがあるそうです。

現在は萱野茂さんが作ったアイヌ語教室に通っており、イタカンロー(アイヌ語弁論大会)には毎年出演していて、令和元年 11 月で 4 回目になったそうです。

前回までは原稿を読みながら出演していたそうです

が、これではいけないと思い、今は心を入れ替えて、 原稿に頼らず話せるように取り組んでいるとも話され ていました。

アイヌ文化との関わり

正子さんの幼少の頃は、お正月頃にウタリ (同胞) のエカシ (おじいさん)、フチ (おばあさん) らが各家を回ってカムイノミ (神への祈り) を行っていたのだそうです。

火 (アペフチカムイ) に向かってカムイノミを執り 行うお父様を見たことがあるとのこと。

夏にもカムイノミを行っていた記憶があり、正子さんが小学校3年生の頃までは行われていたことなども話してくれました。

木幡サチ子 さん



写真:令和元年6月10日平取町のご自宅にて

昭和5年生まれ。平取町貴気別出身。

父は武次郎さんで、母はてよさん。

子どもの頃から貫気別で暮らしていて、その頃の貫 気別コタンには、ウタリ(同胞)の家が15軒あった そうです。

住んでいた家は茅葺屋根で壁が板張り、床も板で作 られていたのだそうです。

サチ子さんは、小学校3、4年生の頃から、近所の 農家で子守りをして働いていたそうです。

子供の頃の一番の思い出は、「5歳の時にハポ (アイヌ語で母のこと)が色鮮やかな和服を買ってく れたこと」だそうで、お母様が無理を押して働いてま で買ってくれたものだったそうです。

菅野家とのエピソード

サチ子さんは、萱野れい子さんよりも年上なのですが、いつもれい子さんを頼りにしていたそうで、まるでお姉さんのような存在と考えていたそうです。

れい子さんが子供の頃に裸足で二風谷小学校に通っていた話をサチ子さんも知っていて、「れい子さんは苦労して育ったけど、今は大したもんだよね」と感慨深げに話してくれました。

サチ子さんは、そんなれい子さんとオーストラリア のシドニーへ旅行に行ったことがあって、一緒に遊覧 ヘリコプターに乗ってシドニー上空を飛んだのだそう です。

その時のヘリコプターの操縦士に流ちょうな日本語で「あんたアイヌか? 本当にアイヌか? 俺、アイヌの女性と結婚したいんだ」と口説かれたサチ子さんが「もう私、お嫁に行く気ないから。大丈夫だぁ」と軽口で返した話をはじめ、旅の思い出話を面白おかしく聞かせてくれました。

アイヌ文化との関わり

平成20年~25年頃まで、二風谷コタンのチセでトマ編み(ゴザ編み)の実演を披露していました。

サチ子さんは今では数少ないアイヌ語話者の一人で もあります。

現在も精力的に地元の小、中、高校や各地の大学に 赴いて、アイヌ文化の講師をなされています。

サチ子さんは今回の取材中、私のリクエストに応え てくれてアイヌ語でたくさん話してくれました。もち ろん解説を交えながらです。

次ページにその一部を紹介いたします。

取材中にサチ子さんが話してくれたアイヌ語

自己紹介

アイヌモシリタ

Aynumosir ta

アイヌの大地・で

カニ アナクネ アイヌモシリ イタカナッカ (<イタ カンヤッカ)

Kani anakne Aynumosir itak=an yakka 私・は・アイヌの土地・人が言う・ても シシリムカ ペッ ホントモ、ノカピラ ホントモ Sisirmuka pet hontomo, Nokapira hontomo 沙流川・川の・中流、額平川の・中流、

ヌキベツ コタン コアパマカ Nukibetsu kotan koapamaka 貫気別・村・に生まれる

エカシ クヌ ワ レコロ カトゥ エトンピア ネ ワ ekasi ku=nu wa rekor katu Etompia ne wa 祖父・私が聞く・して・名前を持つ・様子・エトンピア・である・して

フチ クヌ ワ レコロ カトゥ オイ ネ ワ huci ku=nu wa rekor katu Oi ne wa 祖母・私が聞く・して・名前を持つ・様子・オイ・ である・して

オナ クヌワ レコロ カトゥ タケジロウ ona ku=nu wa rekor katu Takejiroo, 父・私が聞く・して・名前を持つ・様子・武次郎

ウヌ クヌ ワ レコロ カトゥ テヨ ネ ワ
unu ku=nu wa rekor katu Teyo ne wa
母・私が聞く・して・名前を持つ・様子・テヨ・で
ある・して

クレコロ… クレヘ 木幡サチ子 ku=rekor.... ku=rehe Kibata Sachiko 私が名前を持つ…私の名前・木幡 サチ子

オチッネ ルプネマッ クネ コロカ ocitne rupnemat ku=ne korka 至らない・老婆・私である・けれど

クニネネワ タナント オッタ kuninenewa tananto otta 成り行きで・今日・に

ピリカ メノコ アイヌイタク ヌ ルスイ セコロ ハ ウェアン コロ

pirka menoko Aynuitak nu rusuy sekor hawean kor 美しい・女性・アイヌ語・を聞く・したい・と・言 う・ながら

エクペネクス アイヌイタカニ クハウェアン コロアン ルウェネナ。

ek pe ne kusu Aynuitak ani ku=hawean kor an

来る・もの・である・ので・アイヌ語・で・私は言う・ながら・いる・の・である・よ。

[木幡サチ子さん自身の解説 (翻訳)]

「私はアイヌモシッといっても北海道沙流川の中ほど、 額平川の中ほど、賞気別村というとこに生まれました。 おじいちゃんの名前がエトンピアで、おばあちゃん の名前がオイと言います。

父親の名前は武次郎で、母親の名前はてよ。私の名前は木幡サチ子。

至らない老婆の私ですけど、今日の日、美人のお姉 ちゃんがアイヌ語を知りたいと言って聞きに来ました ので、アイヌ語で御挨拶申し上げます」

私に掛けてくれた言葉

サンペ ピリカノ ネァキ しな sampe pirka no nepki SINA 「心・良く・て・仕事・しな」

[木幡サチ子さん自身の解説 (翻訳)]

「心優しくお仕事しなさい」

※アイヌ語表記・翻訳:阪口 諒

草薙美壽子さん

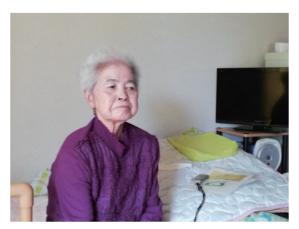


写真:令和元年6月23日平取町の自宅にて

昭和13年生まれ。夕張市紅葉山出身。 5歳の時に荷負本村に引っ越してきたそうです。 両親ともにアイヌの方で、旧姓は木村さん。

子供の頃は、山菜などを採りに山に入るときには必ずお酒や米などを持って行って、沢の神さまや立木の神さま、山の神さまに「これから足を踏み入れますのでどうぞよろしくお願いします」と挨拶をしてカムイノミ (神への祈りの儀式)をしていたそうです。

萱野家とのエピソード

萱野夫妻との思い出に、大阪の国立民族学博物館に 連れて行ってもらったことがあるそうです。

貝澤正さんが亡くなった際に、正さんの枕もとで茂さんがアイヌ語で引導渡しをしていたことは今でも印象に残っていると話してくれました。

二風谷ダム(沙流川ダム)を造るときも皆でカムイノミをしたり、現場での遺跡発掘の手伝いをしたそうです。



アイヌ文化との関わり

お母さまは、男の子を妊娠したまま 33 歳で亡くなったそうですが、亡くなって間もなく錆びた鎌でお腹を裂いて、赤ちゃんの魂も神の国へ行けるようにとアイヌプリ(アイヌ式)の儀式を行ったそうです。草薙さんが 12 歳か 13 歳の頃の出来事です。

子供の頃は、荷負本村の神社の下に自宅がありましたが、ある時、桜の木の下に蛇が溜まってしまって、知り合いの方が蛇の上にゴミを置いて焼いたところ、半分焼けてしまった蛇がチセの下に逃げ込んだため、自宅のチセが全焼してしまったそうです。着の身着のままで弟たちと逃げたのだと話してくれました。

草薙さんは、長年にわたってアイヌ文化活動に参

加して、アイヌ文化振興に貢献してきたことが評価 されて、令和元年度のアイヌ文化奨励賞(公益社団 法人アイヌ民族文化財団)を受賞されています。

阿部義男さん



写真:令和元年6月24日 平取町のご自宅にて

昭和 16 年生まれ。平取町紫雲古津出身。

紫雲古津小学校、富川中学校を卒業されています。 中学まではずっと鍋沢と名乗っていたのだそうですが、高校進学時に役場に行ったら戸籍は阿部になっていたそうです。もともと阿部だったらしいと教えてくれました。

学生時代は同級生ばかりでなく、教師からも酷い差 別を受けていたそうです。

昭和47、8年頃に二風谷に引っ越して結婚なされています。

二風谷で暮らし初めて50年近くになるそうです。

菅野家とのエピソード

二風谷に住居を構えてから、萱野さんと近しくお付き合いしていたそうです。

萱野夫妻と大阪の国立民族学博物館に行ってカムイノミ (神への祈りの儀式)をしたこともあるそうです。「萱野茂さんは一番大切な方だったと思う。萱野さんがいなければ裏の町立博物館も出来ていない」と話されました。

貝澤正さんもウタリ (同胞) に貢献した方で、亡くなった時は藤谷憲幸さんと一緒にアイヌプリ (アイヌ

式)で墓標を作ったそうです。

萱野茂さんと貝澤正さんは二風谷ダム反対運動でも 闘ってくれて、正さん亡き後は貝澤耕一さんが運動を 引き継いでくれたことも教えてくれました。

アイヌ文化との関わり

チブサンケ(舟おろしの儀式)には第1回目から 参加していたとのこと。

毎年チッサンケでは船頭を務めていますが、最近は もっぱら和船の方の船頭をしているそうで、丸木舟は 若くないと操るのが難しいのだとか。

昭和52年のイオマンテ(熊送りの儀式)では、準備作業でカムイノミに使う木を山に採りに行かれていますが、とても寒い冬だったのを憶えているそうです。

チセ(家)造りのために、登別温泉の「ユーカラの 里」や愛知県犬山市の野外民族博物館「リトルワールド」の民族資料館を萱野茂さんや尾崎剛さんと一緒に 見て回ったことや、現在ではチセの材料となるカヤの 入手が難しくなっていることも話してくれました。

昭和33、4年の紫雲古津でのウタリの墓地整理も 手伝ったりしたそうです。

阿部さんはアイヌ協会の理事を 30 年近く務められており、表彰を受けられています。

川奈野一信さん



写真:令和元年7月28日平取町の自宅にて

昭和9年生まれ。平取町長知内出身。

二風谷アイヌ語教室の運営委員長を平成 16 年から 務められています。

萱野夫妻のお話

※川奈野一信さんには、主に萱野夫妻にまつわる話を お聞きしました。

茂さんの人物像を尋ねると「萱野茂さんが食うや食わずのどん底暮らしの中から、アイヌ文化を消さないためにお金を貯めて、アイヌの道具を買い戻したりしていた。意地があったんだ」と話してくれました。

夫妻の印象については、「先生は温厚で他人に優しい、人にモノを教える。れい子さんは利口な人だから 先生が話している時に口を挟まない」と話されていま 1 た

一信さんの母親の上田としさんは、茂さんと一緒に本州各地を講演して回って、茂さんのお陰で世に出られたと感謝しておられたそうです。

母親が懇意にしていたお陰で、一信さんも萱野さん の家に出入りしやすくなったのだそうです。

萱野茂さんと言えば、よくキューピッド役されていたことが思い出されるそうで、二風谷に一人旅をする女性と二風谷の若者を上手く結びつけていたことを話してくれました。

ある時などは、萱野茂アイヌ資料館前にある縁結びの石に手を合わせている女の子を見つけて、「お姉さんどこから来たの? そんなに北海道好きなら北海道にお嫁に来たら?」と話しかけたら「いい人いますか?」と返って来たので、すぐに一信さんの息子さんの勤める会社に電話して「ちょっと溶接してもらいたい所があるから若いものかしてくれないか?」と言ったそうです。何も知らない息子さんは油で汚れた作業服のままで出かけて行くのですが、こんな具合で若い者同士の出会いの演出をしていたのだそうです。

息子さんはこのことが縁で後に結婚することになって、今では一信さんのお孫さんが3人いるそうです。

萱野夫妻は結婚式の仲人もたくさん引き受けておられたことも話してくれました。

一信さんもまた、若い頃のれい子さんが裸足で歩い ていたのを見たことがあって、強く印象に残っている のだそうです。

後日、そのことをれい子さんに聞いてみたところ、「靴は持っていたけど、もったいなくて履かずにいたのよ」と教えてくれました。れい子さんらしいエピソードだなと私も思いました。

一信さんは85歳になった現在も月に2回アイヌ語

教室に通い、萱野茂さんの遺志を継いで運営委員長、 エカシとして指導に励んでおられます。

貝澤美和子さん



写真:令和元年7月29日平取町のご自宅にて

昭和23年生まれ。

熊本県熊本市南阿蘇村出身。

17歳のときに交通事故で母親を亡くしているそうです。

21 歳の時 (昭和 45 年) に二風谷の貝澤耕一さんと ご結婚されました。

結婚した当初は慣れない農作業にとても苦労したそうで、朝4時に起床して7時には畑で作業していないと姑さんに強く叱られたそうで、当時はがむしゃらに働いていたと話してくれました。

貝澤正さんはお舅さんに当たります。

※美和子さんには、貝澤正さんの思い出を中心にお話 を伺いました。

貝澤正さんの思い出

正さんはいつもウタリ(同胞)のために働いていて、 私利私欲が無く、人を疑うことを知らないような人 だったそうです。

晩年には平取周辺の山林が三井財閥の所有物になっていることに憤って、三井の会長宛に手紙を出して亡くなる前までその返事を待っていたのだそうです。

二風谷はアイヌのイオルでアイヌの大切な狩猟の場でした。

正さんは、亡くなる前まで新聞に目を通していて、いつもウタリの心配をしていたそうで、自分の家族よりもウタリのために生きた人だったと話してくれました。

美和子さんは、そんな正さんが大好きだったのだそうです。

正さんが大腸がんを患って、美和子さんの運転で病 院通いをしていたのですが、道中の車の中で、正さん と色んなおしゃべりをするのが楽しかったのだそうで す。

食事制限もあったので、外食などは本当は良くなかったのだけれど、病院帰りに寿司とビールを飲むことが唯一の楽しみだったそうで、「本当に美味しそうにビール飲むのよ。でも病気だったからお寿司だってほんのちょっとなの、でもねそれが正じいちゃんの楽しみだったのよ」と教えてくれました。

正さんと萱野茂さんは、二風谷ダム (沙流川ダム) 反対運動でもたった二人きりで闘ってくれて、決して 他の住民を巻き込むことはなかったそうで、そんな正 さんを妻のしずさんは心の底から尊敬していたようだ とも話してくれました。

正さんはダム裁判の判決が出る前に亡くなってしまったのですが、葬儀はアイヌ式で執り行われて、祭司を務めた萱野茂さんがアイヌ語で印導渡しをされたのだそうです。

現在の美和子さんの日課は、家業の農家を手伝いながら、空いた時間でアイヌ着物を作ったり、サラニブ (編み袋)を作ったりすることだそうです。そんな美和子さんは、食文化や伝統工芸品作りを通じて行ってきた、アイヌ文化の普及啓発や人材育成への貢献が評価されて、令和元年度のアイヌ文化奨励賞(公益社団法人アイヌ民族文化財団)を受賞されています。

菅野志朗さん

昭和 33 年生まれ。平取町二風谷出身。

萱野茂、れい子夫妻の次男にあたります。

亜細亜大学法学部を卒業後は、東京でサラリーマン をしていました。

1992年に萱野茂二風谷アイヌ資料館に副館長として勤め始めて、2006年には館長に就任しています。

両親の思い出

父親の茂さんは勤勉で、お酒も飲まなかったそうで



写真:令和元年7月29日 萱野茂二風谷アイヌ資料館にて

す。

志朗さんが子供の頃は、茂さんが仕事でほとんど自 宅に居ることがなかったので、勉強を教えて貰ったこ とはなかったそうです。

茂さんから聞いたという戦時中の話では、茂さんが室蘭八丁平で飛行場整備に従事していた時に、米軍のグラマン戦闘機から機銃掃射されたことがあって、茂さんはスコップで頭を隠したままで腰が抜けて、その場を動くことが出来なかったのだそうで、「あんなの当たったらイチコロなのに」と茂さんがよく話していのだそうです。

茂さんは子供の頃に押切(草を切る器具)に挟まって右手の人差し指がないため、徴兵検査で不合格にされたそうです。人差し指が無いと鉄砲が撃てないからなのだそうです。

茂さんは八丁平で仕事をしている時もずっと日記をつけていたのですが、終戦時に米兵が来て、何かの証拠に使われては困ると言って日記を燃やされたのだと話されていたそうです。

茂さんはとても記憶力が良かったので「日記が残っていたらとても貴重な資料になったに違いない」と志朗さんは残念がっていました。

志朗さんが二風谷で父親の跡を継ぐことになったのは、1987年に茂さんから「カナダのアラトゲに研修旅行があるので行かないか?」と誘われたのがきっかけだったそうです。

そこで少数民族のクワクワカワク族の方と交流して、 独自の言語を残していく必要性を感じたのだそうです。 母親であるれい子さんについては、「あの年になっ てもウタリ、シサム、どなたにでも分け隔てなく、 アイヌの手仕事を教えているところが素晴らしいと 思う。いつまでも元気でいて欲しい」と話してくれま した。

一度だけ父と母が喧嘩しているのを見たことがある そうで、小学生だった頃のクリスマスに買ってきてく れたケーキが原因だったらしく、父も母も良かれと 思ってケーキを買ってきたのが、2重になってしまっ て揉めていたのだそうです。当時の2人にとっては 大問題だったのだろうなと振り返りながら「アイヌな のにそんなの祝うなということだよ、多分」と笑顔で 話されていました。

石原イツ子さん



写真:令和元年8月15日札幌市のサッポロ堂書店にて

昭和27年生まれ。平取町本町出身。

生家は義経神社の真横にあったそうです。

母は荷負出身のアイヌで父は和人だと教えてくれま した。

中学校卒業まで平取町で育ち、その後苫小牧の美容学校に進学したそうです。卒業後は5年間、美容師として静内や平取で働いた後、勉強し直そうと思い立ったそうで、美容師の仕事に区切りをつけて札幌に移って定時制高校に通ったのだそうです。

高校卒業は25歳だったと教えてくれました。

アイヌ文化との関わり

子どもの頃を過ごした平取本町では、アイヌ文化に 触れる機会は多くなかったけれど、近所のお婆さんで アイヌ語を話したり口にシヌイエ (口の周りに刺青) を施している方が 4 人程居たことを憶えているそう です。

イツ子さんのお母さんは共稼ぎで家計を支えていた そうで、お祖母さんからアイヌ文化に関する事柄は継 承していないのだそうです。ただ、お祖母さんが存命 中は、ゴザ編みの材料のガマ等は、お母さんが採って 来ていたのだそうです。

お母さんは大正 15年の生まれで、8歳から働き始めて亡くなる前の年まで選果場等で働いていたそうで、大変な働き者だったのだそうです。

平取でイツ子さんが育った頃は、アイヌの子が虐められるようなことはなかったけれど、それは表面的なことで、いざ結婚とか就職とかの場面ではいくばくかの差別があったのを見てきたのだそうです。

イツ子さん自身は全く差別を受けたことはないのだそうですが、そのような経験もあって、20歳頃からアイヌ関係の本をたくさん読んだのだそうです。そのきっかけとなったのはの『近代民衆の記録 5 アイヌ』(新人物往来社、1972年)という本を買ってからなのだそうで、とても高価な本だったそうです。その本を読むまで、親にも周りにも言えなかったそうですが、アイヌって凄く悪い印象を持っていたのだそうです。ところが「近代民衆の記録 5 アイヌ」に登場する森竹竹市や知里幸恵のようなアイヌの先人たちは、バチェラー学園に通ったり大学に行っている人もいて、今まで抱いていたアイヌのイメージと違う、そんな同胞がいることに衝撃を受けたのだそうです。

本好きが高じてか、イツ子さんは夫とともに、 1981年に北海道大学前で古書店サッポロ堂を開業しました。現在は札幌市南区真駒内緑町に移って営業しています。

アイヌ関係の書籍を数多く揃えており、アイヌ研究 者や私なども大変お世話になっています。

そんなイツ子さんが「アイヌ文化とか、色々なものに触れている人たちは、私たち以前の人間の、先人の生きた時代の本を読むことが大事だよ」と話してくれました。

川奈野元子さん

昭和15年生まれ。日高町(旧門別町) 広富出身。 4歳まで広富に住んでいたが、父親が亡くなったの を機にペナコリ (荷負) に引っ越したのだそうです。



写真: 令和元年8月18日 平取町のご自宅にて

母親の身体が弱かった為に幼少の頃から母親の手伝 いや農家の仕事などをしていたそうです。

一信さんからご飯炊きを頼まれて、そのまま 16 歳 で一信さんと結婚したそうです。

「押しかけ女房なのよ」とか「喧嘩ばっかりしている のよ」と話されていましたが、本当に仲睦まじくて、 私は羨ましく思いました。

菅野家とのエピソード

アイヌ着物を初めて作った時に指導してくれたのは れい子さんでした。

出来上がった着物を見て、萱野茂さんが「50万出すからその着物売ってくれないかい?」と言ってくれ、横に居たれい子さんが「苦労して作ったんだもの、売れないよねぇ」というやり取りがあったのをその時の着物を見るたびに思い出して懐かしく感じるのだそうです。

アイヌ文化との関わり

元子さんの母親はトマ編み (ゴザ編み) をしていた そうですが、自分では作ったことがなかったそうです。

平取のアイヌ文化保存会に入会してからトマ編みの 技術を習得したのだそうです。

今では二風谷コタンのチセでサラニブ(編袋)作り の実演などもなされているそうです。

元子さんが初めてお産をした時は、二風谷の青木愛 子さんが産婆さんをしてくれたのだそうです。

青木愛子さんはトゥスをなさる方として有名だった そうです。

(※トゥスとはシャーマニズムのような巫術をするひとのこと。)

青木愛子さんは不思議な方だったそうです。元子さんの身体を触っただけで悪い所が分かり、治してもらったこともあるそうです。

元子さんには6人のお子さんがいますが、出産は 本当に楽だったそうで、「もうポンポン生まれた」の だそうです。

本人の弁によると「20分~30分で生まれた。『お腹が張ってきた』と一信さんに伝えると、慌てて産婆さんを呼びに行ってくれるのだけれど、産婆さんが着く前にポンと出ちゃう」のだそうで、元子さんのお母さんには「鶏だって卵産むとき苦しい顔するのにお前だったら」と呆れられていたそうです。

そんな元子さんのお母さんは、数年前に他界してしまいましたが、100歳まで生きての大往生だったのだそうです。

貝澤留治さん



写真: 令和元年8月19日平取町の自宅にて

昭和 10 年生まれ。平取町二風谷出身。

萱野茂さんの実弟で9人兄弟の上から6番目になります。

茂さんは年齢が 10 歳も上なので、兄でもあり父親 的な存在でもあったのだそうです。

兄の茂さんは多くを語ることはなく、ぽつぽつと物を言う人だったと話されていました。

茂さんからは商売の鉄則であるお金の事を教えられ たそうです。

萱野家とのエピソード

れい子さんが茂さんのお嫁さんになって、留治さん ら大家族の中に入って来てくれたことは本当に有難 かったそうで、苦労も掛けたしすごくお世話にもなっ



写真:貝澤留治さんを取材中のひとこま(撮影:前沢卓)

たと話してくれました。

食べ盛りの留治さんら大家族の食事は、大鍋で毎回 作るので大変だったと思うと話されていました。

留治さんが 10 代の頃、茂さんと一緒に営林署の仕事をしていたとのことで、木を伐る仕事は伐れば伐るほどお金になったので朝から夜まで働いたそうです。

山仕事では茂さんに敵わなかったそうで、茂さんは 鋸の使い方が上手かったのだと教えてくれました。

若い頃は、本州にも仕事に行って、地下鉄の仕事などもしていたそうですが、ヤンチャをして 26 歳でお酒を止めたのだそうです。

その頃、庭石ブームが来て桂造園土木を始めたとのことで、今では6町歩の石置き場一杯に石が置いてあるのだそうです。

桂造園土木を株式会社にしたのは、平成8年8月8日で、語呂が良いのでこの日にしたのだそうです。今は娘さんの旦那様が跡を継いでくれていて、孫娘も造園学校に通って庭師に成りたいと言ってくれることが嬉しいのだと話してくれました。

アイヌ文化との関わり

阿寒町の彫刻家だった藤戸竹喜さんとは親戚の関係 だったそうで、よく留治さんの家に遊びに来てくれて いたのだそうです。

留治さんは藤戸さんがハーレーダビッドソンに乗っているのを見て自分も欲しくなり、同じハーレーダビッドソンを買った思い出なども話してくれました。

留治さんの奥様が 100 食近くの蕎麦を作り、焼肉パーティなどもしたことがあるそうで、藤戸さんやびっくりドンキーの社長も参加していたのだと教えてくれました。

そんな関係から、びっくりドンキーの関連会社が経

営している恵庭のえこりん村では、すべての庭園を留 治さんが手掛けているのだそうです。

土屋美枝子さん



写真:令和元年8月19日 平取町の自宅にて

昭和27年まれ。平取町本町出身。

萱野夫妻とのエピソード

2007年に平取でのアイヌ刺繍の上級者コースがあり、参加したのですが、その時の講師が萱野れい子さんだったそうです。

美枝子さんが子供の頃は、萱野茂さんから「平取のお嬢さん」と呼ばれていて、優しいおじさんだったと 教えてくれました。

アイヌ文化との関わり

「生まれも育ちもこの場所なのよ」と笑顔でお話を始めてくれました。

美枝子さんは今もずっとアイヌの手仕事を毎日して います。

アイヌ着物を作ったり、刺繍をしたり、サラニッ (編袋) を作ったりと、自宅の居間がギャラリーのように飾られていました。

多い日は1日10時間ほど手仕事をするのだそうです。

手仕事が趣味で、楽しくて仕方ないのだとお話して くれました。

「手仕事をしている時は時間も忘れてしまうほどです

よしとも話していました。

こうしたアイヌ文化の楽しさを教えてくれたのは貝澤美和子さんで、今はお二人で貴気別小学校などでもアイヌ文化講師をしているそうです。

もともと手仕事が好きで、パッチワークなどの趣味 があったので、アイヌの手仕事もめきめきと上達して、 今では美枝子さんの作ったサラニッが、千葉県佐倉市 の国立歴史民俗博物館に展示してあるのだそうです。

トマ編み (ゴザ編み) もするそうです。「アイヌの手仕事を 50 歳から始めたけど、何かを始める時に早い遅いは関係がない」と話されていて、自分がやりたいと思った時がその人のスタートのときなのだそうです

チブサンケ (舟おろしの儀式) での美枝子さんの最近の役割は、お料理担当で、2019年のチブサンケではラタシケブ (混ぜ煮) とコサヨ (粉粥) 作りに腕を振るったそうです。

私もご馳走して頂きましたが、とても美味しかったです。

毎年5月には貝澤耕一、美和子夫妻は平取町二風谷で「チコロナイ」(私たちの沢)を開催しており、今現在は森を残す為にオヒョウの苗木作りを美枝子さんがお手伝いしているそうです。

このチコロナイでも美枝子さんが食事作りの担当で、 もはや50人分ぐらいなら簡単に作れるようになった と話してくれました。

そのせいもあって、「ケアハウスでの20人分の食事の準備がへっちゃらになりました」と笑っておられました。

山本栄子さん

昭和20年生まれ。十勝管内本別町出身。

24歳で阿寒町の山本文利さんとご結婚。

山本文利さんは阿寒町の山本多助エカシの息子さんに当たります。

阿寒町にお嫁に来てから本格的にアイヌ舞踊をはじ めたそうで、昔はオンネチセなどで毎晩踊っていたの だそうです。

阿寒口琴の会にも入会して、オーストラリア、ウイーン、アラスカなど、世界各地を回ったそうです。

その他、世界の口琴の素材や地域差などについても 話してくれました。



写真:令和元年8月26日阿寒町のご自宅にて

萱野家とのエピソード

昭和40年2月に東京世田谷で庭石の展示会が開かれて、そこに萱野茂さんも来場することを新聞で知ったそうで、出かけて行った会場で茂さんから話しかけて頂いて、帰りには茂さんと弟さんにスパゲッティをごちそうになったそうです。

スパゲッティを食べたのはその時が初めてだったので、とても感動したことを話してくれました。

当時から茂さんは有名人で、金田一京助先生に アイヌ語を教えていたりしたので、凄く尊敬していた のだそうです。

茂さんのお孫さんの公裕さんと、栄子さんの娘のり えさんが結婚するなんて夢にも思っていなかったと話 され、縁とは不思議なものだとも話されていました。

萱野茂さんの「妻は借りもの」という本も読んでいたそうで、「萱野さんのところは夫婦喧嘩もなかったと聞いているし、公裕さんもいい人だしさ、姑さんもいい人だし、おばあちゃんもいい人だからね、幸せだよ、りえは」と笑顔を見せてくれました。

アイヌ文化との関わり

阿寒湖アイヌシアター「イコロ」で上映している阿 寒ユーカラ「ロストカムイ」の写真撮影の時の苦労話 も伺いました。

マイナス 28℃の日の出前から日没まで、阿寒湖の 湖上でアイヌ衣裳を着て、三日間撮影をしたのだそう で、身体は凍えブルブル震えながらの撮影で、とても 辛かったのだと話してくれました。

それでも阿寒町のあちこちに、「ロストカムイ」の ポスターが貼られていることは嬉しく思っているそう です。 栄子さんは、東京のペウレウタリの会にも入会していて、50年以上活動を続けておられます。

溝口尚美さん



写真:令和元年9月17日平取町の萱野れい子さん宅にて

昭和 43 年生まれ。兵庫県加東郡東条町出身。 現在は米国ニューヨークに在住しています。

地元の教育大学を中退した後、大阪の音響の専門学校に進み、卒業後は兵庫県の映像制作会社に就職した そうです。

※溝口さんには「AINU・ひと」を撮影するきっかけ について伺いました。

映像制作会社での仕事は、例えば下水処理場の見学者向けの説明用映像だとか市制 75 周年の映画とか多岐に渡っていたそうです。その中に短編文化映画というジャンルがあって、そのアシスタントもしていたそうですが、その時の師匠(映像ディレクター)から被差別部落のドキュメンタリーを観せてもらったそうです。そのドキュメンタリーでは、被差別部落の女性が語り部となって本当にありのままを語っていて、「ああ本当に部落差別ってこういうことなのか」ということが解ったのだそうです。以降、師匠と一緒に在日のドキュメンタリー等、語り部のシリーズを手掛けるようになったそうです。

その後、国内の景気が下向きになるのに伴って企業からの説明用の映像制作の類の仕事が減って、代わりに TV 局の仕事が増えてきたそうなのですが、TV の



画像:溝口さんの監督作品「AINU・ひと」のポスター

場合はスポンサーの意向もあって、思うような映像が 作れないこともあり、悶々としていた時期があったそ うです。そんな時期に、米国では今まで撮られる側 だった人たちが映像を撮る、例えば障がい者が自分で 自分たちの映像を作る、というような活動があること を知って、興味を持ったことが渡米のきっかけだった と話してくれました。

渡米後、ご自身でも NPO を立ち上げて海外の先住 民族を取材されているときに、海外の先住民族を取材 しておきながら、日本の先住民族のことを全く知らな いでいる自分に気が付いたそうです。

それをきっかけに 2008 年から平取町二風谷に通いはじめるようになって、ある夜、二風谷のアイヌ語教室の見学が終わったタイミングで川奈野一信さんに話しかけられて、今後は川奈野さん宅に泊まるように誘って頂いたのだそうです。お陰で二風谷の色々な方たちと知り合うことが出来たのだそうです。

翌 2009 年に二風谷を訪れた際には川奈野さん宅にお世話になりながら、口承文芸でまだ映像化されていなかった木幡サチ子さんのヌタプカタ(カムイユーカラ)やチセづくりの際の地鎮祭を撮って、海外の先住民族の映像と併せてビデオにまとめて、役場や町立博物館に置いて行ったのだそうです。

2015年に一時帰国した際に町立博物館で置いて 行ったビデオの話をしたところ、アイヌの言葉や文化、 暮らしの様子などを映像に残して継承して行くことが 望まれていることを知って、二風谷の皆さんへの恩返 しとして取り組んだのが「AINU・ひと」の撮影だっ たそうです。

「AINU・ひと」は 2018 年に完成して、2020 年現在、日本各地で上映されています。平取町のエカシである 川奈野一信さんや故・鍋沢保さん、萱野れい子さん、木幡サチ子さんなどの日常や二風谷のお祭りの様子が 収録されています。

感謝の言葉

2019年に「二風谷のフチ 萱野れい子とカッケマッたち」を平取町二風谷周辺の方々に聞き取り取材させて頂きました。

聞き取りを始めた当初は、何をお聞きしたらいいのか分からず、時には録音に失敗したりと戸惑うことばかりでした。

はじめの頃は、改まって敬語を使ってお話を伺っていたのですが、聞き手の私の方が普段と違った態度で接することで皆さんを緊張させてしまっていたようで、普段の顔が隠れてしまうことに気がつきました。

それ以降は、あえて普段の口調で接することにして、 皆さんにも「いつも通りで」とお願いして聞き取りを するようなりました。

そうすることでようやく、いつも通りの飾り気のない素顔の皆さんになって頂けて、お話が伺えるようになりました。

始めの頃は、胃が痛む程苦痛な取材でしたが(自分の取材が下手でイヤになっていました)、取材を進めて行く中で少しずつ楽しくなって行きました。

たくさんの方々が経験した苦労をお聞きしましたし、 時には涙を流してお話してくださったり、心が温まる お話や、お腹を抱えて笑ったりと本当に素敵なお時間 を与えて頂きました。

自宅に戻ってもう一度録音を聞き返すと、「あれも聞けばよかった」とか、「これを聞くのを忘れた」ということが出てくることも度々ありました。

今回の「二風谷のフチ 萱野れい子とカッケマッたち」にご協力頂いたフチ、エカシの方たちは、萱野れい子さん、木幡サチ子さん、藤谷るみ子さん、貝澤ユリ子さん、豊田礼子さん、山内正子さん、草薙美壽子さん、阿部義男さん、川奈野一信さん、萱野志朗さん、貝澤美和子さん、石原イツ子さん、川奈野元子さん、貝澤留治さん、土屋美枝子さん、山本栄子さん、溝口

尚美さんの17名です。

貴重なお話を聞かせて頂きまして、本当に有難うご ざいました。

録音からの文字起こしには、阪口諒さん、北沢実さん、平野明さん、樋口博志さん、久保ともえさん、山田慎太郎さん、石井正樹さん、末下美穂さんの8名の方たちに力を貸して頂きました。

期限がある中で、ご無理を言って引き受けて頂きま して、本当に有難うございました。

阪口諒さんには、木幡サチ子さんが話してくれた、 アイヌ語の部分の文字起こしと翻訳まで付けて頂きま した。本当に有難うございました。

更に、私のイラストを描いてくれた伊藤菜央さん、 有難うございます。いつも名刺代わりに使わせて頂い ています。

その他、文章の校正にご協力くださった帯広百年記 念館の皆さんにもお礼を申し上げます。

皆さんのお力添えがなければ、今回のこの報告書は 出来上がりませんでした。感謝の気持ちでいっぱいで す。

そして私は引き続きこの聞き取り調査を続けて行こ うと思っております。

またどんなお話が聞けるのかと楽しみにしています。これからも宜しくお願いいたします。

帯広にて 2020 年 1 月吉日 笹村 律子

※この事業は、公益財団法人アイヌ民族文化財団の研究出版助成を受けて行いました。